

講演

今日のフランスにおけるアーカイブズ制度と アーキビスト養成 —国立文書学校の在籍生の視点から—

The Archival Institution and Training in France Today:
From the Perspective of a Student of the Ecole nationale des chartes

講演者：イネス・ガビレ

訳者：保坂裕興、牧野元紀

Lecturer: Inès GABILLET

Translators: HOSAKA Hirooki, MAKINO Motonori

キーワード

文化遺産法典、地方アーカイブズ、特命チーム、戦略的枠組み、古文書アーキビスト、
修士生の進路

Code du patrimoine, Local archives, Mission des archives, Strategic framework for the archives
modernization, Careers of students from the Ecole nationale des chartes.

講演要旨

今日のフランスにおいて、国立文書学校のアーカイブズ学の学生であるというのは、どのようなことなのだろうか？これは実際には簡単な質問ではない。フランスのアーカイブズ制度はフランス革命にまで遡る。1790年に国立アーカイブズが創設され、1796年には地方アーカイブズ（現在の県アーカイブズ）が創設された。非常に中央集権的で組織化された制度であり、非常に複雑でもある。1821年には、革命の間に主に王立機関や教会から押収した全てのアーカイブズを調査することができる専門家を養成するために、国立文書学校が設立された。フランスでは、アーカイブズの等級は大きく分けて2つ存在する：国レベルのアーカイブズと地方レベルのアーカイブズ（地方、県、市町村のアーカイブズ）である。現在、世界は急速に変化している。アーカイブズの世界における大きな挑戦は、デジタル・トランスフォーメーションである。これは、フランスの公的アーカイブズ部門の上級機関であるフランス省庁間アーカイブズ委員会が実施した研究の結果である「アーカイブズを現代化するための共通する戦略的枠組み（2020-2024）」の中核をなすものである。学生は永続的に自分自身を適応させなければならず、養成期間は4年間であるが、変化は

続く。

アーキビストの養成については、国立文書学校の修了証書（「古文書アーキビスト」）、文化遺産管理職の管轄機関、そしてアーキビストという専門職との間にある違いを認識する必要がある。これらについては、フランス・アーキビスト協会やウェブサイト *FranceArchives* で様々な職務記述書を見ることができる。国立文書学校はアーカイブズ分野の文化遺産管理職になるための最も格式の高いルートである。授業は主に古書体学（古文書を読むための学問）、中世・近代・現代のアーカイブズ学、書物の歴史であり、主に学生はアーカイブズ機関や図書館の遺産管理職や大学教授になる。しかし最近ではデジタル・ヒューマニティーズという新しい授業科目が現れた。アーキビストは、物理的なコレクションとデジタルコレクションを管理しなければならず、また、情報が広く行き渡る現代社会におけるアーカイブズの重要性を認識していなければならない。この他のアーキビスト養成コースは全国各地にあり、なかでも古くからの有名なものとしてアンジェ大学がある。学生は非常に多くの能力をもち、専門的な課題を認識していなければならない。国立文書学校では、すべての学生が研究テーマにも取り組まなければならないので、多くの科目に精通し、研究者であり、そしてアーキビストになることに備えるよう、自己管理することが重要である。同校の教授たちも、このような課題の全てを視野に入れ、歴史科学と情報科学、科学と技術、理論と実践を結びつけるために、授業を工夫している。

To be a student in archival science France today, in the *École nationale des chartes*, what is it like? It's really not an easy question. The archival system in France dates back to the French Revolution: in 1790, national archives are created; in 1796, local archives (nowadays departmental archives) are created. It is a very centralized and organized system, very complex too. In 1821, the *École nationale des chartes* is founded to train professionals able to explore all the archives seized during the Revolution, mainly from the royal institutions and the Church. In France, two main scales exist in archives: national scale of archives and local scales of archives (regional, departmental, municipal archives). Nowadays, the world is changing very quickly. The big challenge in the archival world is the digital transformation: it's at the heart of the common strategic framework for the archives modernization (2020-2024), the result of the work carried out by the Interministerial Committee for the Archives of France, the higher authority in French public archives services. A student must adapt himself permanently: the training is four years long, changes go on.

About the archivist formation, you must make the distinction between the diploma from the *École des chartes* ("archiviste paléographe"), the administrative body of heritage curators and the profession of archivist; you can find job descriptions in the Association of French archivists and on the website *FranceArchives*. The *École des Chartes* is the most prestigious way to become a heritage curator in archives. The teachings are mainly paleography (to read ancient documents), medieval, modern and contemporary *FranceArchives* history of books; the students become heritage curators in archives or in libraries, university professors, mainly. But new teachings appeared these last years, as digital humanities. The archivist must be able to manage physical

and digital collections, and be aware of the importance of archives in our society where information is widely spread. Other archivist trainings exist all over the country; among the more ancient and renowned, is the University of Angers. A student must be very polyvalent and aware of professional challenges; in the *École des chartes*, every student must also work on a research topic, so it's important to manage to be good at a lot of subjects, to be a researcher and to be ready to be an archivist. The professors from the *École des chartes* too are thinking of all these challenges and try to adapt their teachings, to make the link between historical sciences and information sciences, science and technique, theory and practice.

はじめに

私の名前はイネス・ガビレです。フランスの学生です。パリにあるフランス国立文書学校：エコール・デ・シャルトで勉強しています。この学校は、アーカイブズ学、書物の歴史、テキストの歴史を専門としています。その学生は全員アーキビストとしての訓練を受けていますが、全員がアーカイブズの専門家になるわけではありません。

私はこのたび、日本の大学に所属し、アーカイブズの職場体験ができることをとても嬉しく思っています。それは、別のアーカイブズ・システムを発見する機会になりますし、日仏両国のプロフェッショナルが交流する機会にもなるからです。

これまでの勉強については、トゥールーズでエコール・デ・シャルトの入学試験のために2年間を費やしました。エコールでのコースは4年間で、現在、私は最終学年です。各学生は研究プロジェクトを遂行しなければなりません。私は17世紀バロック音楽の歴史、特に歌われたラテン語のテキストに焦点を当てて研究してきました。音楽は私の情熱の一つです。また、私はどちらかというと言問の世界に興味があり、できるならば文学の教授になりたいと思っています。

文書遺産の歴史はエコール・デ・シャルトの専門分野であり、エコールの教育の中心は、書かれた言葉の歴史について世界的視野を与えることです。書かれた言葉はアーカイブズや図書館に保存されています。テキストや言語の歴史を研究する上で、さまざまなテキストに関する知識は大きな財産になります。だからこそ、エコール・デ・シャルトの学生はテキストの歴史のプロフェッショナルでもあり、私もこのあとその道を歩むつもりです。

なぜ日本に来たのか？と聞くと、私はいつも日本の文化、文学、映画に深く惹かれていました。特に夏目漱石、黒澤明、小津安二郎、宮崎駿が好きです。専門的な知識を広げ、日本語を上達させ、この壮大な国を発見する機会にしたいと思います。私はインターンとしてここにいられることがどれだけ幸運なことであるのかを分かっています。これを可能にしてくれた、全ての人に感謝いたします。

(ここまでは日本語、以降は英語による。)

私は国立文書学校の学生としてこの場でお話しします。現在22歳で、アーカイブズの世界についてまだまだ学ぶべきことがたくさんあります。今日のフランスにおけるアーカイブズの制度や養成について、できるだけ多く私の考え方を述べたいと思います。とくにアーキビストの養成については、その養成を受けている最中ですから、様々な事柄を述べやすいのではと思います。

本日は次のように話をすすめます。

第1部：アーカイブズ制度 The Archival Institution

- I 国レベル National scale
- II 地方レベル Local scale
- III 目的 Objectives
- IV 課題 Challenges

第2部：アーキビスト養成 The Archival Training

- I アーカイブズ専門職 The Archivist Profession
- II 国立文書学校のケース The case of the Ecole nationale des chartes
- III 課題 Challenges

第1部：アーカイブズ制度

国立文書学校の学生になると、学ばなければならないことがたくさんあり、アーカイブズと図書館の世界という、輝かしく新しい世界を発見しなければなりません。授業（中世、近代、現代のアーカイブズ、諸機関の歴史）では、膨大な量の文書に気づかされます。私たちは研究テーマを見つけるように言われ、ほとんどの学生がアーカイブズ資料の研究を選択します。ですから、1年生はすぐにアーカイブズの世界に慣れなければなりません。アーカイブズの世界は専門職の世界ですから、それを一人一人が知るためにはインターンシップや卒業生との交流が不可欠で、それによってこの業界を知ることとなりますが、私にはインターンシップや専門家との交流がまだまだ十分ではないように思います。

さて、フランスのアーカイブズの歴史について少し触れたいと思います。そのためには現在のフランスのアーカイブズ制度をよく理解する必要があります。現在のアーカイブズの組織はフランス大革命に起源をたどることができます。革命家たちはある原則を立てました。すなわち、人民が行政つまり政府の行動をチェックできるようにしなければならないということです。そこで、革命家たちはアーカイブズの部局を創設し、誰もがアーカイブズにアクセスでき、閲覧できるようにしたのです。1790年には国立アーカイブズが、1796年には地方アーカイブズつまり現在の県立アーカイブズが設立されました。外務省、陸海軍省、財務省などは自身のアーカイブズを持っていて、現在まで続いています。

19世紀をとおして、歴史学の専門家や各機関がアンシャン・レジームすなわち大革命以前のアーカイブズを研究し、整理をおこないました。こうしてアーカイブズのための大規

模な収蔵庫が建設されました。アーキビストという専門職には、適切な訓練が必要でした。そういうわけで、1821年、ルイ18世は国立文書学校を設立しました。この学校については第2部で詳しく述べます。

現在のアーカイブズ制度については、文化遺産法典（Heritage Code, Code du patrimoine）にも触れなければなりません。これはアーカイブズを含む文化遺産に関するフランスの法律です。つまり、この法律の条文はアーカイブズにも権限が適用されており、2004年2月に公布されました。条文は、アーカイブズのために2つの主たる原則を定めています。

- フランス革命の遺産としてアーカイブズをあらゆる市民に無料で公開すること。
- ただし以下、一定期間保護される秘密文書もある：
 - 国家機密は25年から50年
 - 私的生活に関わる秘密は50年から120年

I 国レベル

では、国レベルのアーカイブズについてお話ししましょう。国レベルのアーカイブズ機関のほとんどは、文化省の管轄下にあります。この文化省の中に、フランス省庁間アーカイブズ委員会（SIAF）があり、以下の国立アーカイブズを統括しています：

- 国立アーカイブズ（パリ、ピエールフィット・シュル・セース）
 - 国立海外アーカイブズ（エクス・アン・プロヴァンス）；アジアを含む植民地と20世紀のフランス史を研究するために不可欠なコレクションです。
 - 国立労働アーカイブズ（ルーベ）；社会史研究者には必須のアーカイブズです。
- そして、独自のアーカイブズを保管している省庁があります：
- 軍事省：国防史編纂部（ヴァンセンヌ）
 - 欧州外務省：MEAEアーカイブズ・ディレクション（ナント、ラ・クルヌーブ）
 - 財務省：経済・財務アーカイブズ局（パリ、サヴィニー・ル・タンブル）

フランス国立アーカイブズは1790年に設立され、文化省に属しています。パリにあるオテル・ド・スービーズと、パリ近郊のピエールフィット・シュル・セースにある2013年開館の新しい建物の計2カ所にあります。コレクションは次の通り。

- 書架延長383 kmと電子記録113 TB（2022年）
- 公的アーカイブズ：
 - 1789年以前
 - 1789年以降：中央省庁および政府のアーカイブズ
- いくらかのプライベート・アーカイブズ：寄贈されたものなど。

地方のアーカイブズ機関について話す前に、「ミッション・デ・アルシヴ（mission des archives）」、つまりアーカイブズ機関特命チームについて簡単に説明しなければなりません。

ん。FranceArchivesは、フランスのアーカイブズに関する多くの情報を発信する重要なウェブサイトですが、これらの特命チームについて、通常のアーカイブズ機関の業務と混同しないように非常に明確な定義をしています。

各省庁の中央管理部門は、陸軍省と欧州外務省を除いて、〈アーカイブズ機関特命チーム〉を置き、そのリーダーはフランス省庁間アーカイブズ委員会（SIAF）出身のカテゴリAの職員である。すなわち、彼ら彼女らはしばしばアーカイブズにおける文化遺産管理職であり、国立文書学校の出身者である可能性がある。各省庁の中央管理部門とそれに依存する国の公的機関のアーカイブズ資料を科学的・技術的に管理している。特定の行政機関については、このミッションは中間アーカイブズ（プレ・アーカイビング）の管理も担当している。国の中央省庁の重要なアーカイブズ資料を国立アーカイブズに移管するのは、この特命チームである。

なお、以下は文化遺産法典（R213-3条）から引用した科学的・技術的制御の定義です。

文化遺産総局のフランス省庁間アーカイブズ委員会が行う科学的・技術的制御とは、アーカイブズの管理・収集・選別・廃棄のあり様に関わるものであり、アーカイブズの単なる処理、分類、保存修復、提供にとどまらない。

II 地方レベル

地方レベルでは、地域圏（région）、県（département）、市町村のアーカイブズがあり、これらはすべて地方行政の業務であり、国の業務ではありません。

地域圏アーカイブズの設立は1983年です。フランス革命以前は、地域圏は地域的な文化を持つ通常の行政区画でした。革命家たちは、それが君主政治を思い出させると考え、行政区としての地域圏を廃止し、国土を県という単位での新しい小さな行政区に分割しました。しかし、20世紀半ばになると、地域圏を再創造する考えが浮上します。それが1983年に実現しました。

各地の地域圏アーカイブズは、その地域圏の管轄下にある地域的なアーカイブズ部門です。

コレクションは以下の通りです。

— 書架延長120km

— 地域圏議会、地域圏各公共施設、地域圏各機関のアーカイブズ

つまり1983年以降の現代アーカイブズがあり、州の歴史を調べるには、国立アーカイブズか県のアーカイブズに行く必要があるということになります。

県立アーカイブズの歴史はもっと古く、1796年に設立されました。県当局の管轄のもと、そこに属する地方の文書について地域的なサービスが行われています。

コレクションは次の通り、非常に豊富で多様です。

- フランス革命以前の君主制時代のアーカイブズ
- 国の外局および地方局のアーカイブズ
- 一般参事会および県議会からのアーカイブズ
- 市町村とその公共施設からの寄託アーカイブズ
- 病院施設からの寄託アーカイブズ
- 公証人アーカイブズ
- 個人アーカイブズ

市町村のアーカイブズの多くは、中世から存在しています。市町村アーカイブズは、市町村に依拠した地域サービスです。

コレクションは次の通り。

- 市町村のアーカイブズおよび市町村の公共施設のアーカイブズ
- 市民登録簿（住民の出生・結婚・死亡などの記録）と土地登記簿

市民登録簿と土地登記簿はよく使われます。全ての市民は、例えば財産管理問題などで、遅かれ早かれ照会することになるのです。

国立文書学校の学生たちは、主に国立アーカイブズや県立アーカイブズに研究やインターンシップに行きます。というのも、アーキビストになることを選択した場合、主にこれらの業務に携わることになるからです。学生たちにとって国立アーカイブズと県立アーカイブズは非常に身近な存在です。県立アーカイブズは、たとえ地域のサービスであっても、ほとんどの場合、国立文書学校の卒業生であるような、国家公務員が館長を務めています。学生にとって難しいのは、それらアーカイブズの異なる分類をマスターすることです。特に県立アーカイブズのウェブサイトやリサーチツールはそれぞれ大きく異なっており、慣れるのは容易ではありません。

次の表は、2022年におけるフランスのアーカイブズ業務に関する主要な数値です。13の

表1 フランスのアーカイブズ業務の主な数値（2022年）

	アーカイブズ機関の数	被雇用者数	閲覧者数	文化事業への参加者数	新規受入れアーカイブズ（モノ）の量 （単位＝書架延長キロメートル）	新規受入れアーカイブズ（電子）の量 （単位＝テラバイト）	収蔵アーカイブズ（モノ）の総量（単位＝書架延長キロメートル）	収蔵アーカイブズ（電子）の総量（単位＝テラバイト）
フランス国立アーカイブズ	1	476	7237	190744	4.4	29.2	383	113.3
国立海外アーカイブズ	1	39	1664	201	0.005	0	36.6	0
国立労働アーカイブズ	1	23	345	5058	0.345	0	49.2	0.077
地域圏アーカイブズ	10	74	267	1438	2.33	1.8	119.8	7.2
県立アーカイブズ	99	3066	75206	424375	46.5	12.6	2825.4	65.8
市町村アーカイブズ	423	1440	32693	269223	30.8	19.9	827.8	82.6

地域圏に10の地域圏アーカイブズがあり、101の県に99の県立アーカイブズがあり、423の市町村立アーカイブズがあることがおわかりになるでしょう。被雇用者の数、閲覧者の数、文化的イベントへの参加者の数も示されており、この年に収蔵された新たなアーカイブズの量が物理的にもデジタル的にも把握できます。

Ⅲ 目的

次に、アーカイブズの主な目的は、保存 (preservation)、アクセス (access)、情報普及 (dissemination)、促進 (promotion) とされています。

アクセスは、重要なポイントの一つです。誰もがアーカイブズの閲覧が可能でなければなりません。アーキビストは、この権利を一般の人々に知らせるという社会的役割を自覚しなければなりません。国立文書学校ではアーキビストの役割の社会的な側面を強調する教授もおり、私も重要なことだと考えています。なぜなら、学生のうちはそのような考えにはなかなか至らないからです。

アクセスは次の通りです。

- 閲覧室における屋内アクセス：研究の手助け、文書の複製、自由に使える作業スペースがあります。
- ウェブサイトやデジタルアーカイブズによるリモートアクセス：利用登録、文書利用の予約、通信手段を用いた調査、アーキビストとのビデオ会議、リクエストに基づくデジタル化などのサービスがあります。

FranceArchivesというウェブサイトはとても便利です。これはフランスにおけるアーカイブズの全国ポータルサイトで、多くのアーカイブズ・サービス（例えば国のアーカイブズや県のアーカイブズ）によって調査研究をすることができます。

重要なウェブサイトの例は、次の通りです。

- フランス国立アーカイブズのバーチャルルーム
- FranceArchives
- 各県のアーカイブズのウェブサイト：システムがそれぞれ大きく異なり、統一されていないのが難点。

ウェブサイトは、フランスに数多く存在する研究者やジニオロジスト（系図学者）にとって、遠隔からアクセスするのに不可欠なツールです。国や県のアーカイブズ・サービスでは、デジタル化の大規模なキャンペーンが常に進められており、それには大きな予算が費やされています。

促進活動はもう一つの重要な側面です。アーカイブズはあまり知られていないことが多く、国立文書学校の学生がそれを言っても、ほとんどの場合、人々はその制度はもちろん、アーカイブズが実際にどのようなものであるかを知りません。

様々なプロモーションは次の通りです。

- 展示会：最近では国立アーカイブズで、フランス革命期の王室に関する展示会を行っています。

- 会議（シンポジウム）
- 系図と古文書に関するワークショップ
- 出版物：展覧会カタログ、会議録（シンポジウムのプロシーディング）、教育用パンフレット

文化省と国民教育省は、芸術文化教育を優先しており、アーカイブズのサービスもこのプロジェクトの一部です。そのため、授業、教育ワークショップ、教育ツール（例えばボードゲーム）、教員養成のための実地でのサービス訪問を企画実施しています。

IV 課題

アーカイブズの世界では、様々な課題が山積しています。ここでは、これらの課題の全般的な考え方を示す二つの文書を紹介しします。

最初の文書は、文化省が博物館、歴史的記念物、科学的・自然的遺産、アーカイブズの各専門家、つまりそれぞれの専門分野の文化遺産管理職とともに作成した、文化遺産政策への市民参加に関する法律ガイドです。文化遺産政策への市民参加は、現在大きなテーマトピックとなっています。

二つ目の文書は、アーカイブズの現代化のための共通する戦略的枠組みについてのものです。次の図はフランス省庁間アーカイブズ委員会によるもので、2020年から2024年までに取り組む課題をまとめています。それぞれの目的別に色分けされています。左端青色（1-3）は「利用者をシステムの中心に据える」、オレンジ色（4-6）は「デジタルアーカイビング：規模を拡大する」、紫色（7-9）は「アーカイビングを行政のデジタル変革の中心に据える」、黄緑色（10-11）は「公共アーカイブ・サービスの収集・保存政策を発展させる」、桃色（13-15）は「進行する変化の中における職員支援」になります。

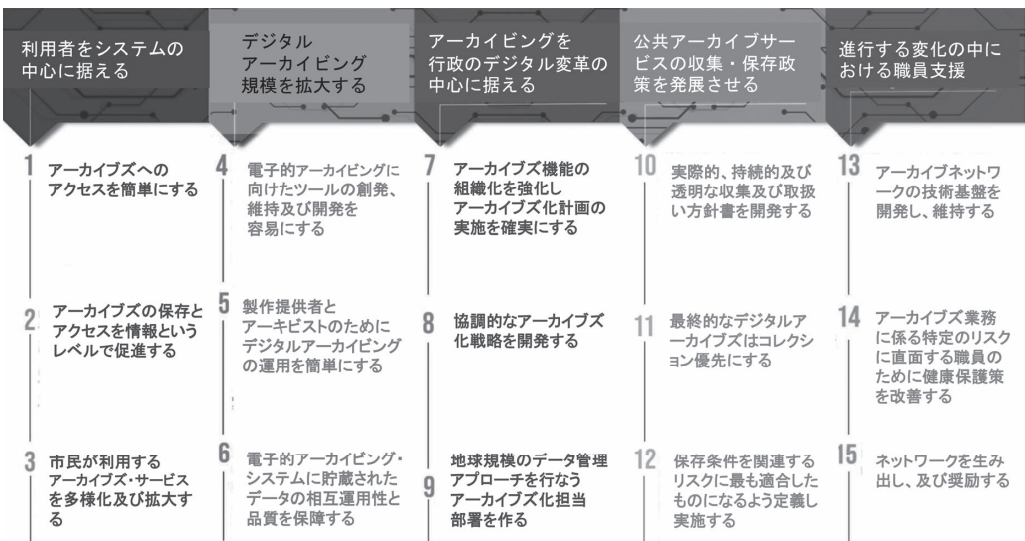


図 アーカイブズを現代化するための共通する戦略的枠組み

学生という立場から思うのは、私たちは今、変化の激しい世界の真ただ中にいるということです。国立文書学校での養成期間は4年間ですが、その間にアーカイブズの世界はどんどん変化しています。学生は理論と実践を組み合わせ、職業人にならなければなりません。私たちはアーカイブズの世界を知らねばなりません。それは非常に多様性に富みますが、あまり多くのインターンシップを得られていません。4年間のうちのたった2度だけです。一人のアーキビストとして求められるものも変化し続けます。物的なモノとしてのアーカイブズのコレクションだけでなくデジタルコレクションも取り扱えるようにならないといけませんし、すべてのあらゆる情報に精通せねばなりません。それだけにコロナウイルスのため遠隔授業を余儀なくされたことで、事態はより難しくなりました。私の学生1年目はずっと遠隔授業であり、トレーニングのスタートとしては望ましいものではありませんでした。

第2部：アーキビスト養成

アーキビスト養成についての話を始めるにあたり、なぜ私が国立文書学校の試験を受けようと思ったのかを簡単にお話しします。それは私が歴史と文学が好きだからです。また、文化遺産の保存にも惹かれました。そのため、実家からそれほど遠くなく、私が知っていて大好きなトゥールーズで入試準備期間（プレパ）を送ることにしました。

しかし、文書学校ではアーカイブズや図書館の世界を知ることになりました。準備学校ではやるべきことがたくさんありすぎて、そんなことは考えてもいませんでした。準備学校の授業は主に歴史の授業で構成されていますが、それは国立文書学校が学生にしっかりとした歴史的知識をもってもらいたいと考えているからです。このような次第で、プレパと国立文書学校での養成期間には大きな違いがあります。

I 専門職としてのアーキビスト

フランスにおける専門職としてのアーキビストについて語るにあたっては、ある重要な区別があります。

- 国立文書学校の修了証書は「古文書アーキビスト (archiviste paléographe)」である。アーカイブズ管理職になることは、この学校の学生の可能性の一つですが、すべての学生がアーカイブズ管理職になるわけではありませんし、学校がアーカイブズ管理職だけを養成するわけでもありません。国立文書学校の学生の主な進路は、アーキビスト、ライブラリアン、大学教授です。
- 文化遺産管理職の統括組織について：アーカイブズ管理職もその一部ですが、専門分野としてはアーカイブズはほかの専門体系の一つ（国立文化遺産機構の5つの専門分野：アーカイブズ、考古学、博物館、歴史的記念物、科学・技術・自然遺産）として位置付けられます。
- アーキビストという専門職には様々な側面があり、いくつかの初期的養成課程があり

ます。国立文書学校が最も有名ですが、アンジェ大学の修士課程のように非常に優れた大学の養成課程もあります。

付け加えますと、フランスにおいてアーキビストとは、アーキビストとレコード・マネージャーの両方を意味します。私たちはその違いを区別しません。

そう、そして国立文書学校を卒業しても、専門職の道に入るためには別の試験に合格しなければなりません。試験を受けずに専門職に就くこともできますが、それはより複雑になります。主に3つの試験があります。

- NHI (Institut national du patrimoine : 国立文化遺産機構) 試験：アーカイブズあるいは他の専門分野の文化遺産管理職になるための試験。
- ENSSIB (Ecole nationale superieure des sciences de l'information et des bibliotheques : 国立高等情報科学図書館学校) 試験：図書館の管理職になるための試験。
- アグレガシオン試験：大学教授になるための試験。博士号取得の前後に取得することが多いです。

全般的に言いますと、アーキビストという専門職には、いくつかの初期的養成課程があるということです。国立文書学校はその一つに過ぎず、また、アーキビストだけを養成しているわけではありません。アーカイブズ学の修士課程はたくさんあります。私は国立文書学校の養成について承知していることになるので、ここではそれについてだけ詳しくお話しします。

フランスにおけるアーキビストの職能を理解するのに役立つ、専門職に関する主要な説明は次の通りです。

- AAF (フランス・アーキビスト協会) のような専門家団体の重要性を強調しなければなりません。この団体は非常に重要な専門的文献を作成しています。そこではフランスのアーキビストが向き合わなければならない課題を見つけることができます。
- FranceArchivesは職務記述書 (job descriptions) も提供しています。

私は、アーキビストの主な任務については長く述べません。その任務はいわば普遍的なものだからです。次の通りです。

- 取得
- 分類と記述
- 保存
- 促進
- アクセスと普及
- 場合によっては管理 (主に管理ポスト)

このように、アーキビストに求められるスキルは多岐にわたります。

II 国立文書学校のケース

では、私が一番よく知っている国立文書学校についてお話ししましょう。それは、フランス大革命で処刑されたルイ16世の弟にあたるルイ18世によって1821年に設立されました。大革命の際、王室に関わる機関や教会から膨大なアーカイブズが押収されたために、これらすべてのアーカイブズを研究、分類、整理する専門家が緊急に必要とされました。そう、この学校はその目的のために設立されました。

現在、この学校の主な授業は以下の通りです。

- アーカイブズ学 (中世、近代、現代)
- 組織・機関の歴史 (中世、近代、現代)
- 古書体学(古文書を読むための学問) : 「古文書アーキビスト (archiviste paléographe)」
という名称はここからきています。
- 考古学
- 文書形式学
- 文献学
- 法制史
- 文書史
- 書物史
- 芸術史
- デジタル・ヒューマニティーズ

この学校にはこの数年の間、次のような入門的養成課程があります。

- 「古文書アーキビスト (archiviste paléographe)」の修了証書は創立当初からあるものです。入学試験に合格しなければなりません。毎年20人の学生が入学し、4年間の学問を積むことになります。
- この学校はいくつかの修士号を創設しました。申請により入学が許可され、2年間学びます。以下の修士学位があります：
 - 歴史に応用するデジタルテクノロジーズ
 - デジタル・ヒューマニティーズ
 - トランスナショナル・ヒストリー
 - 中世研究

最初の2つの修士号は、デジタルアーカイブズの専門家が非常に必要とされていることを示しています。

具体的に言うと、私が来年6月に取得する「古文書アーキビスト (archiviste paléographe)」という修了証書は、最初の2年間は一般的な共通科目に出席し、3年次から自分がどのような職業に就きたいかを考え、それに応じて選択科目を選びます。4年生になると、卒業後に受けたい試験の準備をします。先に述べた3つの試験です。

修士課程については、「歴史に応用されるデジタルテクノロジーズ」の修士号を例に挙げますと、1年次には一般的な共通科目の授業があり、2年次には高度な授業があります。

この国立文書学校における養成課程では、さきほど述べたような具体的な特定の授業だけでなく、文書についての調査や解説、目録作成、テキスト編集、比較アーカイブズ学、アーカイビング・スクール、エンコーディングと開発といった実践的な作業のほか、見学やインターンシップ、研究プロジェクトで構成されています。

卒業を目指して各学生は修士論文を提出しなければなりません。博士論文ほどではありませんが、修士論文よりは高度なものです。テーマは多岐にわたりますが、私自身は17世紀のフランスの音楽家、マルク＝アントワヌ・シャルパンティエの作曲した宗教音楽のラテン語テキストについて研究しています。

以下に、国立文書学校の過去4年間における修了生の進路について数字をいくつか示しておきます。2018年度の修了生は6人がアーキビスト保存管理職となり、それぞれ県立アーカイブズ、フランス省庁間アーカイブズ委員会、パリ市立アーカイブズ、欧州外務省アーカイブズ、国立アーカイブズに就職しました。2018年から2021年にかけては修了生がアーキビストのキャリアを歩んでいることがよく示されています。2018年には6人、2019年に5人、2020年に7人、2021年には4人がアーキビストになっています。それとともにアーキビスト以外の進路を取る修了生がいることもわかります。

表2 国立文書学校修了生の進路：2018年から2021年まで

	アーカイブズ分野の文化遺産管理職＝アーキビスト	図書館分野の文化遺産管理職	博物館分野の文化遺産管理職	歴史的記念物分野の文化遺産管理職	科学・技術・自然遺産分野の文化遺産管理職	高等教員資格又は博士号取得課程	その他	未定
2018年	6	3	0	1	0	3	4	2
2019年	5	5	2	0	0	5	3	0
2020年	7	3	2	0	0	3	4	1
2021年	4	3	0	0	1	5	5	2

Ⅲ 課題

専門職については一般的な課題があります。このような課題は、日本の皆さんもご存知だと思います。様々な雇用者がいて、様々な任務があるため、アーキビストには真に多様な価値観が求められます。アーキビストという職業は非常に多様で、働く場所によって異なる職務についているアーキビストもいるようです。

突然の変化というものも多々あります。その最大のものとはデジタルアーカイブズの位置づけで、フランスでは大きな話題になっています。国立文書学校が創設した修士号（すなわち、デジタル・ヒューマニティーズ、歴史に応用するデジタルテクノロジーズ）がそれを証明しています。コンピュータやスマートフォンなど、アーカイブズの作成ツールは世界的に増加しています。アーカイブズの量は膨大であり、プロのインフラストラクチャー（基盤整備者）として自ら適応していかなければなりません。

このような課題に対して、学生たちはどのように感じているのでしょうか？国立文書学校では、非常に豊富で様々なトレーニングが受けられますが、習得すべき分野が多岐にわ

たるため、求められるものは非常に厳しいです。また、入学のための難しい試験をパスした後、卒業後のための新たな試験をパスしなければならないのは、心理的に困難なことです。専門職につくためには長い道のりがあります。

国立文書学校の学生にとっての強みと困難さは複数の能力を有さねばならないことです。学生は次のことをしなければなりません。

- 研究プロジェクト：すなわち修了論文
- 多くの科目が得意であること
- 専門的な課題と職業の現実を認識すること
- 自分の道を見つけること：アーキビスト、ライブラリアン、文献の歴史家など

私自身は、ライブラリアン、アーキビスト、そして最終的にはアグレガシオンの試験（高等教員資格）を受けるつもりです！インターンシップや専門家になった卒業生との交流によって、その方向性は大きく左右されます。そのような専門職に本当になれるのかは上手く想像できません。今はまだ学生ですが、少しずつ専門家として認められるのでしょうか。

私のこれまでの話をふまえ、締め括るために、アーキビスト養成に向けての実際の課題について、私の先生の一人、エドゥアール・ヴァスール教授のご見解を紹介するのは意義あることと思われます。彼は近現代アーカイブズ学と近現代制度史を担当する教授です。このスライドは確か昨年作成されたかと思います。今日、アーキビストには多くのスキルが求められています。私は一人の学生としてこの見方に全く賛成です。ここに示すヴァスール教授の図式は、歴史科学と情報科学、物的アーカイブズとデジタルアーカイブズ、古い時代のコレクションと現代のコレクションを同時に管理する必要があること、文書の製作

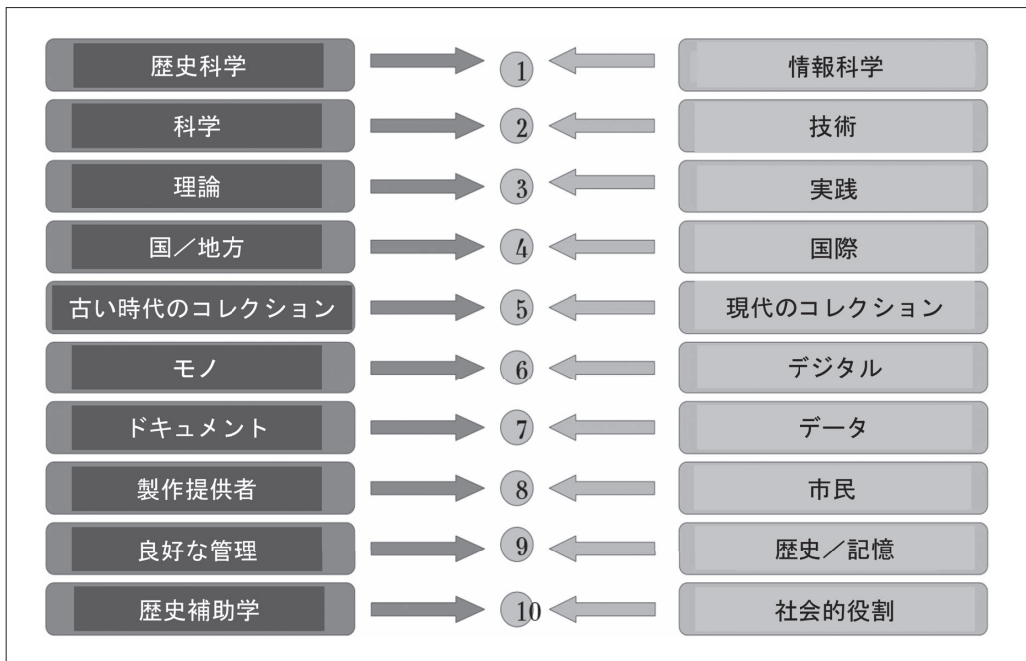


図 アーカイブズ学教育の実際の課題：国立文書学校教授エドゥアール・ヴァスールの視点

提供者と市民との間のこと、歴史補助学としてのアーカイブズ学のこと、アーキビストの社会的役割などについて考える必要があることを示すものです。アーキビストという職業の複雑さを実によく表していると思います。青色で示す左側のディシプリンは比較的長く伝統的なものであり、黄色で示す右側のディシプリンは比較的最近のものであります。国立文書学校は「古文書アーキビスト (archiviste paléographe)」養成においていま組織改革の最中です。この改革を通じて黄色のほうのディシプリンについての知識がより多く与えられることになるのではと考えています。エドゥアル・ヴァスール教授によるこの図はアーキビスト養成に向けての新しいアプローチを示していますし、良いことだと私は思います。

最後に、私がこのささやかなプレゼンテーションを行うために使用した、有用な情報源をいくつかあげさせていただきます。

- FranceArchivesにあるフランスにおけるアーカイブズ・サービス活動のデータ：
<https://francearchives.gouv.fr/fr/article/37978>
- 年次活動報告書等：<https://francearchives.gouv.fr/fr/article/37979>
- フランスにおけるアーカイブズネットワークについて：<https://www.gouvernement.fr/le-reseau-des-archives-en-france>
- アーカイブズを現代化するための共通する戦略的枠組み：<https://www.gouvernement.fr/cadre-strategique-commun-de-modernisation-des-archives-3042>

これらのソースはほとんどがフランス語のものですが、DeepLやGoogleLensといった翻訳機能を使用することができます。

以上です。ご静聴ありがとうございました。

